



藤原の末子加藤主計頭清正はもとと尋らるる美濃の國
 稲葉山城主存藤結貞の臣下小加藤忠左衛門
 忠と名君有忠は無類の性質をて
 多のと教さ再應の諫を君の怒
 と蒙り竟不浪人となり計村の
 隠遁して銀治職を兼ぐる名と主計助
 とよび一人の子あり知名と竹松とをて
 生きたるく小力強く天然の文智あり父
 主計助不才文達を継ぐ有かつて死木の
 石乃稲葉山の開道と告て切腹ありぬ此
 時水井早太と父なる者立聞くと
 存藤注進をよんと計村
 壇のうげより文出すとて



父の竹松有かつて石と取て投げ
 有る小舟殺さる是より竹松は秀
 吉の隠ひ荒之助清正と改名あり
 二心あり仕四天王とて
 と成り後世に名をたると
 秀吉は加藤清正の城主
 と成りて新築を命ぜり
 在国より入るるに
 頼の者天折
 内と職しとて大い
 面々唇をくく城下とて
 燃るこおありぬ
 之取まて十六歳の。



口虎之助 物と詩
 申す女 奇を
 申せし命ハ巴まの
 物と思つら主人ありハ主
 人の命執ありハ親の命か
 已む益不命と捨る久則
 ら命の盗人あり我ハ
 當城主羽柴の臣あり
 て加藤虎之助清正と
 名案を執り兩人土お午
 かつて母との風聞を長と
 上りて見あり重正と

加藤主計頭清光もこと尋るふ美濃の国
 前髪立おて見廻りの時不
 土手の下やて二人の大男
 一のまに削り戦う者有
 誰引こる者も
 虎
 之助土
 手の上やて
 大音益
 人止
 二人も我
 々も益人
 と叫ハ何

君の無道
 忠と云者有忠無類の性質あり
 ありと敷き再應の諫ふ君の怒
 と蒙り竟不浪人となり近村ふ
 隠道一や銀治職之業一と名と五郎助
 とよび一人の子あり知名と竹松と云て
 生きたるく小力強く天然の天智あり父
 五郎助木下あり遠き縁も有つて死木の
 ぞみ箱葉山の閑道と告て切腹あり此
 時永井早太といる者立聞くと
 存藤へ注進する人と牡丹花
 壇のうづより文出すとせ



竹松有つて大石と取て掛け
 存る小形殺さる是より竹松へ秀吉
 吉本置ひ虎之助清正と改名あり
 二心あり仕四天赤へ入
 と成し後世公認もとせり
 秀吉江島長濱の城主
 と成し新城幸と臨り
 在国より入来るむ
 頼の者天折を領
 内と置しるる小姓の
 面々替るる城下とて
 廻るこおあり虎
 之助来り十六歳の。

虎之助
 申すや汝
 申せらんと益人
 申せらんと命ハ己まの
 物と思つり主人ありハ主
 人の命親ありハ親の命を
 己む益命と捨るハ則
 ち命の益人あり我ハ
 昔城主羽柴の臣の
 て加藤虎之助清正と
 名架されハ兩人土お半
 とつて世下の風聞を長
 やきて公見あり重宝とて因





召れ
家来と抱下りて
いふあ心へぞと問た
虎之助申す我
君奉幣 國征伐
の太舟と成りふ
敵本何平元服
あいで即供お

加増
カウ元
版申付
らま申
國の先手と

剛抱かたききとるる 来る其ら八木村入藏
井上大九郎ありそこのの勇氣天
晴天下の名將とも成らふきで人と
見請候身不肖るがく臣下とも
成々これ六銀馬の券と及す
いづくと泪あふ願うおを虎
之助申入我未だ小祿お家
臣と養うて成難しとて
この下より兩人た上食さるるも
若くかたき
是非
と願
たつた飯と分ちても



能前寺
いふ元分の
働きた
あはく
よ存名
抱し
申上
心あり

勤上理信長公より
并鎖のヒヤ
のそ尋不備前
色光の太刀と賜
高田の
城主ト
引組違ふの谷底へ落入りて

本第の隨一より其後小旗長と今も
主候の物とす
此と
吉田の
天
御取の
又由
本第
二

日本武尊... 祖國... 思ひ... 志... 折柄引鐘... 義... 木山... 時... 天正十五年... 薩... 征伐... 島津... 降... 清正...



三韓と征伐鎮撫を名月八月... 雲を覆われ名臣佐者... 忠義の將... 身とありしが日夜不兼... 信... 法華...

何と立つ居... 矢猛... 伏見城の方と... 向より白雲... 衆砂煙... 京原君と清正...

妙徳種蓮華



國本多忠勝と組敷首とらんと思ひしがかなも
 主と討取んぬ敷くさきとありと思ひ忠勝不申し
 々々我兩身と討ふ思ひず立歸つて忠と成り候
 重なり勝負と云々一之折柄引鐘ふよる物別と
 有る筑西の役少人ひこの勇士木山彈正とより大強
 の者と戦ひあやまつて鐘と岩不突當る其力
 か馬驚きその若馬あせり時木山一すなりたり
 此の一突と鐘と擡下と其一折柄引鐘ふよる物別と
 さぬ故に彈正の殿と切る彈正馬より落る
 と押首ととる天正十五年薩島征伐
 島津の猛將新納武藏守と度々戦つて
 其の更なる勝敗多く後竟る島津も降参
 是より加藤主計頭清正丸刃の神



何と立つ居
 つ心ハ矢猛
 公ハ伏見城不
 清平天正
 四年京地口

口掃る大地震
 折まや屋
 石瓦とひ
 砂礫天を
 此時秀吉

とてひびの國隈本や戒郭と構
 三韓と征伐鎮撫する年月ハ存
 雲々獲られ名臣俊者ふよる
 けいものたふすかゝる忠義の將まれ
 ども諺者の舌やまらまら大関の
 動氣と衆り葦原登居の
 身とありしが日夜不兼
 て信む事法の華

妙徳重盛

経て讀下して我君のふい
 祈り次々この神島氣免さるんこと



出入の君命と輕き
 多りと伏見城の方と
 諫の居る所不
 向より白き駒お
 衆砂煙と
 一とまりと
 と呼ぬは長徳川
 京康若也清正因



進んで参上
 夫我君の妻
 来る家康
 行て
 守ご
 致せんと申さる
 清正有難と馬を絶棄せし

小田原陣より清正が本陣に陣取り
 今と諸陣備進し候しと申す
 此の事美事なり其の事公の事
 不従ふ怒りの命なり
 此の命は清正の命なり
 此の命は清正の命なり
 此の命は清正の命なり



今
 差免
 大平の門
 後田原の長曾我
 部官内世補元親征伐

此の命は清正の命なり
 此の命は清正の命なり
 此の命は清正の命なり
 此の命は清正の命なり





清正諸軍不

一刀のみ

断出帆す 壁と無越(馳)入て

と破り金山浦(浦)を築

回を締める大見(見)の遠

田ひちまき
途不在
狼ありとそ

勇敵といぬ玉城(城)の大
羽の如(如)き超(超)將軍(軍)と云
猛將(将)入(入)る由(由)勅(勅)して暮

と曲(曲)居(居)る清正(正)城



先達(達)金(金)山

と切(切)取(取)る取(取)口

とと難(難)く校(校)う

海(海)の邊(邊)上(上)

陸(陸)區(區)王(王)城(城)

近(近)く通(通)詰(詰)る

内(内)野(野)中(中)倉(倉)

庫(庫)あり開(開)き

池(池)が中(中)先(先)

主(主)大(大)閣(閣)

其(其)の傍(傍)の

米(米)の庄(庄)

所(所)に

橋(橋)あり

戦(戦)の功(功)つり 竟(竟)に

降(降)伏(伏)の

元(元)入(入)る

三(三)年(年)大(大)閣(閣)を

向(向)は

清(清)正(正)秀(秀)頼(頼)の

為(為)す

小(小)治(治)の

清(清)正(正)入(入)國(國)七(七)年(年)六(六)月(月)四(四)日(日)



清正諸軍の
出帆する
一乃みまき

破り金山浦に至り
回を希む大虎と連

勇敵びぬ玉城の大
朋の加勢海軍の
猛將入替り由前と暮
と曲居る清正城
口をせしむ野々
と破り金山浦に至り
回を希む大虎と連

勇敵びぬ玉城の大
朋の加勢海軍の
猛將入替り由前と暮
と曲居る清正城
口をせしむ野々
と破り金山浦に至り
回を希む大虎と連



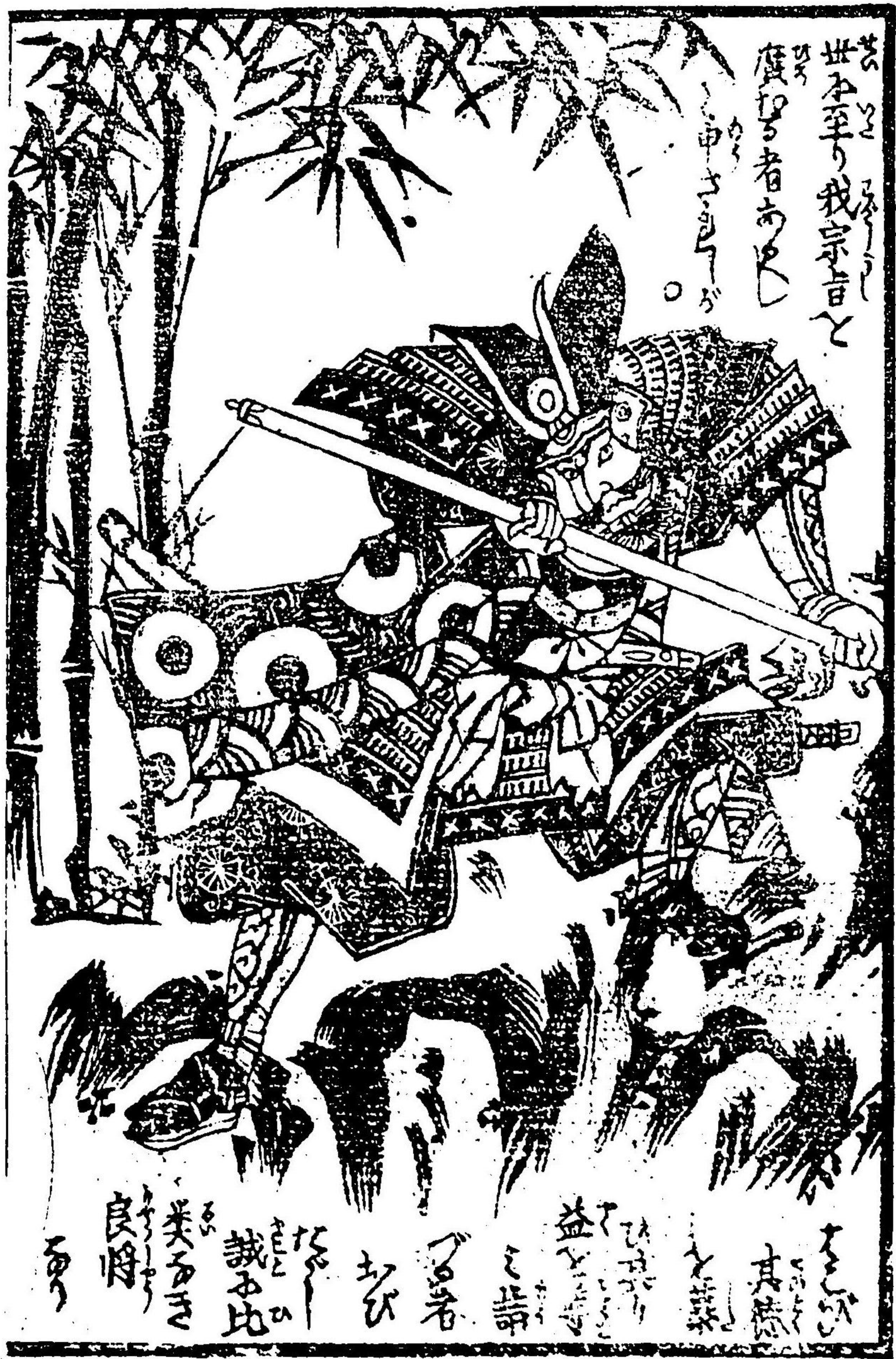
先達て金山
海の濠水上
陸途玉城
近く追詰る
此野中倉
庫あり開き
見おかし
幸大関
世々後の
米と此
野中倉
橋

と切取と取口
とと難と投と難戦易
戦の切つり竟お朝鮮国平定と
降伏の人質お王子
二人と連降陣と後
お家康と送
國とつむ慶長
三年大関内他界の後徳
川公と共に大坂城お秀頼と不
一同お年関を原戦争お在國お
て関東の味方ある清正秀頼の
為お心と足らずと難共天理の差
おはさるおや終お板お伊賀守と
謀お入る同七年六月因



聞て廿日行年五十二又
て隈本城を於て逝去す若
年より余多の戦場を往來
し向う所敵なく君お
忠と尽し一國を仁義と
施し二十八日夜お法華
經を讀誦怠りあぐ九劫不
宗門と廣む
其昔し日
蓮上人九
劫の久宗
門と廣む
て檢せ上人常九劫の後

○是清正のてあぐ一死後
淨池防殿
清正公大
神祇と尊
隈本城の天守
櫓を安置す
とより其あ
すを所お分
衆ありて二百有
余年の今日不
至るやや諸
人遠きよ
り歩行と



世に至り我宗言と
廣むる者あぐ

其徳
益を
諸
る者
おび
誠お地
美るま
良將
あり

明治三十二年三月十三日發行

總發行人兼

淺草駒形町甲三番地
兒玉又七

價二匁